岩手県立盛岡第一高等学校　国語科　指導案

実施日　平成十五年　十月十七日　　実施クラス　普通科　一年一組　　指導者　及川　浩純

科目名	国語総合（現代文）
指導領域	探求　国語総合（現代文・表現編）「読むこと」
単元名	詩歌
教材名	「宮沢賢治詩抄　『高原』『岩手山』」
指導事項	・イ　文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりする。 ・ウ　文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。
単元の目標	・詩の言葉がつくり出すイメージや情感を味わう。 ・詩の言葉に託した作者の「思い」を読みとる。 ・作品の背景となる作者の人生や価値観を学ぶ。
評価観点と評価規準	・「関心・意欲・態度」…事前の調べ学習において、朗読の仕方を工夫し、情報を整理して収集している。 ・「読む能力」…表現の特色とその効果を理解し、作品の情景、作者の心情を的確に読みとっている。
年間指導計画における位置付け	・指導事項イ…一・二期において随想、評論、小説教材の表現の特色に触れ、三期以降は更にその理解を深めていく途上において、詩歌表現の醸し出す独特の作品世界を味わう。 ・指導事項ウ…これまで四つの小説教材において、人物、事件、背景の把握と的確な心情理解を指導してきたが、詩歌教材においては、作者の生涯や価値観を背景とした情感や作品意図の読みとりを行う。
単元の指導計画	・一時間目（本時）「高原」「岩手山」…方言の効用を理解し、詩の言葉がとらえたイメージの特異性を味わう。 ・二・三時間目「永訣の朝」…詩の構成や情景描写の特徴を理解する。 ・四時間目「雪」…短詩の魅力である「連想」の効果を味わう。 ・五時間目「崖」…作品の背景と作者のメッセージを読みとる。 ・六時間目「この部屋を出てゆく」…ユーモラスな表現を味わい、作品の持つバイタリティーを理解する。
本時の目標	・方言を含む音声表現の面白さ、効果を味わい、情景、情感を読みとる。 ・詩の言葉の特徴と作者の視点の移動を読みとり、言葉に込められた作者の「思い」を理解する。 ・宮沢賢治の生涯と作品の関わりについて理解する。

本時の学習指導計画

過程	指導内容	学習活動	評価の規準と評価方法	備考
導入	調べ学習リポートにより、作者と作品への関心を高める。	生徒の調べ学習リポートをもとに、宮沢賢治の生涯について、生徒の印象や感想を聞く。	事前に配布された調べ学習リポートから、宮沢賢治について新たに知ったことや意外だったこと、感銘を受けたことなどを発表する。	
展開	「高原」 ①音声表現の面白さを味わう。 ②方言の効用について理解する。 ③情景、情感を読みとる。 ④朗読の効果的な方法を理解する。 「岩手山」 ①作者のイメージの特異性を把握する。 ②詩の言葉の特徴を読みとる。 ③作者の視点の移動を読みとる。 ④作者の生涯を背景にして作品を解釈する。	「高原」 ①生徒の朗読テープを発表する。 ②方言の持つイメージについて考えさせ、方言が詩に用いられた場合の効果について考えさせる。 ③「鹿踊」のビデオを見せ、詩に描かれた情景と、作者の心情について考えさせる。 ④作者の心情を効果的に表現する朗読の工夫をさせる。 「岩手山」 ①岩手山の写真数葉を見せ、一般的な岩手山のイメージと詩の特異なイメージの差異を印象づける。 ②構成の特徴、詩的言語の特徴を把握させる。 ③一・二行目と三・四行目で作者の視点がダイナミックに変化していることに気づかせる。 ④調べ学習リポートをもとに、作品の言葉が意味するものを考えさせる。	「高原」 ①音声表現の面白さと作品のリズムを味わう。 ②方言が詩に対して持つ効果を考察して発表する。 ③「光る山」がどのように「光」っていたのか考え、作者の心情を発表する。 ④朗読テープの中で、最も作者の心情を効果的に表現する読み方はどれか考えて発表する。 「岩手山」 ①一般的な岩手山のイメージを発表し、作品のイメージとのギャップを意識する。 ②対句形式、科学用語の使用について指摘する。 ③視点がどのように変化しているのか、考察して発表する。 ④「古ぼけて黒くゐぐるもの」「きたなくしろく澱むもの」が何を意味するのか、調べ学習リポートを参考に考察して発表する。	「高原」 ②基…方言の効果を理解している。 評…「素朴さ」「リズミカル」といった点が指摘できる。 ③基…情景、心情を理解している。 評…「太陽を受けて光り輝く風にうねる草原＝広大な海原と波」「躍りあがりたくなるような爽快感、躍動感、自然との一体感」等が指摘できる。 「岩手山」 ②基…詩の言葉の特徴を理解している。 評…一・二行目と三・四行目の対句的構成、「散乱反射」「微塵系列」という科学用語が指摘できる。 ③基…視点の移動を理解している。 評…「見上げる視点」「見下ろす視点」が指摘できる。 ④基…詩の言葉が意味するものを考察している。 評…「父に象徴される旧弊」「肉体的欲求」等が指摘できる。	
まとめ	①方言の効果を味わう。 ②宮沢賢治の独特な作品の言葉を味わう。	①方言が詩にもたらす効果を、次の「永訣の朝」で確認する。 ②宮沢賢治の他の作品を紹介する。	①「永訣の朝」を朗読し、方言部分の効果について考察する。 ②宮沢賢治の特徴的な詩的言語を指摘する。	

・言語活動例…「書くこと」イ（ウ）本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりする。

・補助教材…調べ学習リポート「宮沢賢治年譜」「岩手山と賢治」「父・政次郎と賢治」「賢治の『禁欲』・女性観・恋愛観」

国語総合（現代文）

宮沢賢治詩抄

組　席

「高原」（春と修羅）

一　朗読の工夫

海だべがど　おら　思たれば
やつぱり光る山だたぢやい　賢治の気持ちは？

ホウ→驚き？感心？ため息？歓喜？解放？やまびこ？etc

髪毛　風吹けば
鹿踊りだぢやい　賢治の気持ちは？

感

感

感

「ぢやい」はどう発音するか？

二　「方言」のイメージ

マイナス・イメージ

プラス・イメージ

三　「山」の「何」が「どのように」光る様子が「海」に見えたのか？

四　「髪毛　風吹けば　鹿踊だぢやい」とは「何」が「どのように」なる様子のことか？

五　「ホウ」をどう読むか？

「岩手山」（春と修羅）

そらの散乱反射のなかに
古ぼけて黒くゑぐるもの
ひかりの微塵系列の底に
きたなくしろく澱むもの

一　一般的な「岩手山」のイメージは？

二　この詩の特徴として気づいた点は？

三　この詩の前半と後半で変化しているものは？それはどのように変化しているか？

四　この詩で賢治は、「岩手山」を、何を象徴するものとして見ているか？「古ぼけて黒くゑぐるもの」「きたなくしろく澱むもの」それぞれについて考えてみよう。

＊調べ学習リポート一二、一三ページを参考にしよう。

「古ぼけて黒くゑぐるもの」……

「きたなくしろく澱むもの」……

調べ学習　第二班　宮澤賢治年譜作成班

組　氏名

西暦（月日）	年齢	出来事	詳しいエピソード
一八九六（明治二九）八／二七	0	岩手県稗貫郡花巻町大字里川第一二地割字川口町二九五番地（現・花巻市豊沢町四－一一）**父・宮澤政次郎、母・イチの長男として生まれる。**	「賢治」という名は叔父の治三郎が命名。木曜日、午前七時頃に誕生。八／三一午前五時　襖が吹き飛び土壁が崩れるほどの除羽大地震。**母イチは「えじこ」の上に身を伏せて賢治を守った。実家の職業は古着商兼質屋。**
一八九八（明治三一）一一／五	二	**妹・トシ生まれる。**	おもちゃをとった友達が返してくれるまで**泣き続け**、返したあとも**泣き続けた。**
一八九九（明治三二）	三	**家人が朝夕唱える「正信偈」「白骨の御文書」を聞いて暗唱する。**	離縁されて実家に帰っていた伯母ヤギが、賢治を寝かしつけるときに経文を読んで聞かせた。それを暗記して**四歳頃には暗唱できた。**大変かわいがられ、外で遊ぶことはあまり許されず、**家の中で一人で遊ぶ**ことが多かった。
一九〇一（明治三四）六／一八	五	妹シゲ生まれる。	父の友達にもらったまんじゅうを、貧しい子供に分けてあげた。
一九〇二（明治三五）九月	六	**赤痢**を病み、花巻町本城の隔離病舎に入る。	一つ年上の友人が小学校に上がり、自分も行けると思っていた賢治は行けないと知って大泣きした。しかたなく、一年早く教科書などを買い与えた。現在の花巻小学校の辺りにあった病舎。看病していた**父・政治郎も赤痢に感染してしまい、このことが賢治の負い目となる。**
一九〇三（明治三六）四月	七	**花巻川口尋常高等小学校（現・花城小学校）入学。**	**小学校時代のエピソード**　一年生の成績は、修身・国語・算術・遊戯・操行が**全甲の優等生**。欠席は一年を通して二八日。非常に礼儀正しく言葉遣いも丁寧で、賢治といえば「きかしい（賢い）」で有名だった。優等生の賞品として、六年間教科書をただでもらった。肱（ひじ）に大きな腫れ物ができて石炭酸を塗られる。**痛いと言うと父に叱られた。**痛みのあまり雪の上をのたうち回った。
一九〇四（明治三七）四／一	八	弟清六生まれる。	友達とすすき野に行って遊んだとき、**枯れ草に火をつけて遊んでいた**ら大きな火になってしまい消火につとめる際、**右の肩を焦がしてしまった。**同級生の佐藤金治・大橋秀治とあわせて「秀才三治」と八木先生に呼ばれた。全甲の優等生。
一九〇五（明治三八）	九	三年生の担任八木英三から、**童話の読み聞かせ**を受ける。	先生に叱られ廊下に出され、茶碗を持たされた生徒が辛そうだったので、「ひでがべ」と言って**中の水を飲んだ。**友人の一人が、当時珍しかった赤シャツを着てきたため、「メッカシ」といじめられた。賢治は見ていてたまらなくなり、その輪の中に飛び込み、「おれも赤シャツを着てくるから、な、**いじめるならおれをいじめてくれ**」と言った。荷馬車にひかれた友人の足の指を、「痛がべ、痛がべ」と言いながら**夢中で吸った。**
一九〇六（明治三九）八／九～一八	一〇	大沢温泉で花巻仏教会の仏教講話会があり、暁烏敏（あけがらすはや）の講話を父に連れられて聞く。	暁烏敏の部屋の襖にぴったりつくようにして寝た。父から先生の世話を言いつかったので、何かあったらすぐ起きられるようにと考えて。粘土で仏様を作ったり、裏用紙に描いたりした。
一九〇七（明治四〇）三／四	一一	妹クニ生まれる。	よく友達や弟、妹を集めて**コックリさん**をした。
三月		尋常科卒業。六年制になったので五年に進級する。	一一歳の時、「立志」という題で作文を書いた。**「お父さんの跡を継いで**、立派な商人になります」。
		鉱物採集に熱中する。	家族に**「石コ賢さん」**と呼ばれた。
一九〇九（明治四二）三月	一三	花巻川口小学校尋常科卒業。	短歌を作り始める。**石川啄木「一握の砂」の影響。**
四／五		**岩手県立盛岡中学（現・盛岡第一高等学校）入学。寄宿舎に入る。**	国語・地理得意。数学・物理科学・体育が不得意。**運動神経の鈍さ**にかけてはクラス一。猛背。鉄棒の逆上がりができなかった。父を非難した短歌、「父よ父よ　などて舎監の前にして　大なる銀の時計を捲きし」。寄宿舎では**先輩の言うことをよく聞いた。**文句も言わずニコニコしながらランプ磨きや部屋の掃除をしていた。
		盛岡近郊で植物、鉱物採集をする。	遠足や郊外の散歩の時には、いつも腰に愛用の金槌（鉱物採集用）をぶら下げていた。押入や机の引出しは**岩石だらけ。**
一九一〇（明治四三）六／一八	一四	二年生植物採集隊約八〇	

九／二三～二四		名に加わり、山県教諭の引率で**岩手山に登る。**	真夜中の一時に出発、ご来光を山頂で拝む。
一九一一（明治四四）五／一五	一五	青柳教諭の引率で**岩手山に登る。**	中二の成績は一三五名中四八番。
一〇月		三年生小岩井農場へ遠足。**南昌山でうるしにかぶれる。**	一・二月　スケートに熱中するが上達しなかった。級友に「変人」扱いされるような**奇行**が目立ち始める。寄宿舎祭で飾りに使う紅葉を取るときにうるしを取り、「俺はうるしなどに負けない」と豪語して切り口の汁を顔に塗ったら翌日真っ赤にかぶれた。花巻温泉で静養した。
年末		薩摩琵琶が流行し、習う。	教科書はほとんど勉強せず、哲学書を読みあさっていた。**教師に不満、あるいは物足りなさを感じ反抗していた。**
一九一二（明治四五・大正元年）五／二七～二九	一六	四年生修学旅行。北上川を下り、石巻、松島、塩釜、仙台、平泉、中尊寺を見学。	生まれて初めて海を見て、「何だあれは。あの不思議なものは何だ」とたちすくんでしまった。船酔いを経験。「魔物の海だ」と思う。
一九一三（大正二）三月	一七	**舎監の排斥運動に加わり、寄宿舎を追放される。**	従兄の橋本英之助の卒業を祝い、写真に短歌五首を添えて贈る。当時、自彊寮は、学校の「白亜城」に対して「黒煙城」と呼ばれていた。
四月		盛岡市北山曹洞宗清養院に下宿。	平均点七〇点以上だったのが舎監追放騒動のあとは六五点。体操は落第点。岩手山への憧れのため登山回数が増加、啄木歌などとの接触で仏教に目覚めたこと、思索と短歌に熱中したことなどが成績悪化の原因か。
五／二一～二七		北海道修学旅行。函館、小樽、札幌、白老、室蘭、大沼を見学。	
五月		北山の真宗徳玄寺に移る。	土曜には標本採集一泊二日の山歩き。
八月		北山の眼教寺で島地大等の法話を聞く。	
九月		葬宗報恩寺の尾崎文英について参禅。	
一九一四（大正三）三／二三	一八	**盛岡中学校卒業。**	**八八名中六〇番の成績**で卒業。
四月		**鼻の手術のため、盛岡市の岩手病院に入院。手術後発熱し、発疹チフスの疑いがあると言われる。**	夢で、白髭をはやし白い着物を着た「岩手さん」が手に持った剣で腹を刺したため、目が覚めた。その日から熱が下がった。入院中、**看護婦に恋**をし、結婚したいと父に申し出たが反対されて断念した。
六月		退院。帰宅し店番をしたり養蚕の手伝いをする。**進学、恋愛について悩む。**	
八月～		父の蔵書の島地大等「漢和対照妙法蓮華経」を読み、**法華経の教えに感動する。**	
		盛岡高等農林学校進学を許される。	
一九一五（大正四）二月～三月	一九	**受験勉強**のため、北山の時宗教浄寺に下宿する。	
四月		**盛岡高等農林学校（現・岩手大学農学部）農学科第二部（大正七年農芸化学科と改称）に主席入学。**寄宿舎日啓寮に入る。	**「がんばる」が口癖。**誰か熱心に勉強していると、「がんばっていますね」とニコニコ調で励ました。 「化学本論」「タゴール詩集」を愛読。 **「常盤円満、模範生徒**、学生にしては珍しく宗教方面にも熱心」と、先生・生徒からも人望があった。

		妹トシ、日本女子大学家政学部予科に入学。寄宿舎責善寮に入る。	
		土・日曜日には盛岡近郊の山野を歩く。	
		盛岡高等農林学校の仏教青年会に入り、島地大等の法話を聞く。	
		歌日記を書く。	
一九一六（大正五）三／一〇～一八	二〇	東京、静岡、大阪、京都、奈良、大津の農事試験場などを見学。解散後、伊勢、二見ケ浦、渥美半島、知多半島、箱根を周遊。	妙法蓮華教を読む。「法華経こそ人類全体最後の帰着点」。
四月		高農二年、**特待生となり級長を命じられる。**	**成績優秀、誠実無類。あだ名は「神様」。**前屈みで早足で歩くのが特徴で、遠くからも賢治とわかった。鉄棒はぶら下がるのだけは得意。歌が上手。
八月		上京。帝室博物館を見学。埼玉県秩父三峰地方を旅行。	ドイツ語の講習会へ通う。
		同級生と盛岡付近を踏査し、「盛岡附近」地質図をつくる。	教授が買ったドイツ語の本を一度に借り、全ての内容をすらすらと述べた。関教授に、「宮澤君には何もかも教えてしまったから、もう何も教えることはなくなった」と言われた。
一〇月		仙台・福島・山形地方を旅行。	
一二月		上京。	父の商用のため。浜町の明治座観劇。
一九一七（大正六）一月	二一	盛岡近郊でスキーを習う。	
四月		高農三年、**特待生、級長、旗手を命じられる。**	
		盛岡市内丸二九三井郷芳方へ清六らと下宿。	
七月		陸中海岸を旅行。	
		同人誌「アザリア」第一輯発行。	友達四人と岩手山登山。道に迷って野宿。
八月		江刺郡の地質を調査し、種山を歩き、原体剣舞を見る。	九／一六　祖父・喜助永眠。賢治は死を悼んで五首の短歌を作った。
一九一八（大正七）二／二	二二	父あて書簡で信仰の違いを述べる。	
		信仰、就職、兵役のことでしばしば父に手紙を書く。	
二月		得業論文「腐食質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」提出。	
		童話「蜘蛛となめくじと狸」「双子の星」	
三／一五		盛岡高等農林学校本科を卒業。	
四月		研究科に進学。関豊太郎	

			を指導主任として、小泉多三郎、神野逸馬と稗貫郡の土性調査に従事。
五／一〇			**菜食を始め、約五年間続ける。**
五月			盛岡高等農林学校実験指導補助を嘱託される。
六月			徴兵検査丙種合格、徴兵免除。
九月			化学実験中、県内の土壌にイリジウムを発見。
			土性調査完了。盛岡高等農林学校実験指導補助を解かれる。
一〇月			父が西鉛温泉へ療養に行き、代って家業をみる。
一一月			**トシ東京で発病。** 小石川区雑司ヶ谷一二〇番地東京帝国大学医学部付属病院小石川分院（または永楽病院）に入院。
一二／二六			母イチとともに東京へ看病に行く。小石川区雑司ヶ谷町一三〇番地雲台館に泊り、永楽病院に通う。
一九一九（大正八）～一二月	二三		トシを看病。病状の小康を見て上野の図書館に通う。妹の病状を報じた手紙に託して、将来の進路について父と相談する。東京で人造宝石製造を計画するが、全快したトシを伴って帰宅する。
三月～九月			トシ日本女子大学卒業。家業に従事する。浮世絵を蒐集する。

他の患者が便所の手洗い場に投げ捨てた汚物を、黙って洗い流していた。

荻原朔太郎の詩集「月に吠える」に刺激された。

貧しい労働者が金を借りに来ると、妹・クニから金をもらい、両手を広げて上に上げ、「百倍にして返すよ」と言い、その金を持って貧しい人の所へ走っていった。父に、「いったい何のために農林学校へいったのだ。何を学んできたのだ。蜻蛉などを勉強するためにではあるまい。お前はとうとう人の道の根本を忘れ、仏の道にも背き、邪道に入ったのではないか。もっと人のためを考えろ」と、**こっぴどく叱られる。**

組　　席

西暦（月日）	年齢	出来事	詳しいエピソード
一九二〇（大正九）五／二〇	二四	**盛岡高等農林学校地質学部研究科修業。家業に従う。**	関豊太郎教授から助教授に推されたが辞退。
		田中智学の日蓮主義宗教団体国柱会に入会、信行員となり布教に努める。	国柱会の田中智学の命令ならば、シベリアにでも中国の奥地にでも行く、下足番として一生を終えてもいい、と書簡で述べている。
九／二九		トシ、母校花巻高等女学校教諭心得となる。	トシは英語と家事（家庭科）を担当。
一二月		**町内を寒修行する。**	「南無妙法蓮華経」と高らかに唱え、親戚の家の前では特に長く立ち止まって高唱した。**父は舌打ちし、「困ったことをするものだ」と、眉をひそめた。**
一九二一（大正一〇）一／二三	二五	**父母の改宗が聞き入れられないのを理由に無断で上京。**	父が浄土真宗を信仰していたのに対し、賢治は日蓮宗を信仰していた。それに加えて家業の質屋の店番で、賢治は、質草の値打ちがたとえ一円くらいのものであっても農民たちに深く同情して三円とか五円とか平気で貸していたことに対して父とのいさかいがあった。だから、家業の質屋兼古着商への罪悪感と父が改宗しないことへの反発で家出を決意した。 悶々として店番をしていると、**何もしないのに**後ろの棚から「日蓮上人御遺文集」「日蓮上人御書文集」の**二冊が落ちてきて、背中にあたった。**賢治は、「今だ。今こそ俺は家を出るのだ」とひらめいた。五時一二分東京行きの汽車まであとわずか。台所に飛んでいって手を洗うとご本尊の「お曼陀羅」と二冊の本と洋傘を持ち、誰にも告げずに家出した。
一／二四		上野着。国柱会館を訪ねる。	
一／二五		本郷区菊坂町七五番地稲垣方に下宿。	「うなぎの寝床のように細長い」四畳間に下宿。
一／二六		東京帝大前の謄写出版社文信社に勤めながら布教する。	大学の講義を謄写印刷して学生に売る商売。ここで、朝八時から夕方五時半まで座りっぱなしの仕事をしていた（一頁二〇銭）。賢治は歩くのも読むのも書くのも超人的なスピードだった。
二月		高知尾智耀から文芸によって大衆の教えを広めるよう言われて創作に熱中する。	高知尾智耀は、賢治が無断家出であったため**かなり適当にあしらった**ようだ。
四月		上京した父と伊勢、京都、奈良を旅行する。	政次郎はこの旅行で息子・賢治との融和をはかろうとした。
八／二五		童話「かしわばやしの夜」	爆発的な勢いで童話を書いた（**一ヶ月に三千枚**書いたこともある。）。
九／一四		童話「月夜のでんしんばしら」	
九／一五		童話「鹿踊りのはじまり」	
九／一九		童話「どんぐりと山猫」	一直線に自己の主張を盛り込もうとした、作者の若々しい情熱が感じられる。
九月		**トシ病気の知らせで帰郷する。大トランクいっぱい原稿を持って帰る。**	このときトシは喀血した。結核のようだ。大トランクには「蜘蛛となめくじと狸」「風野又三郎」などが入っていた。
一〇月		藤原嘉藤治（花巻高等女学校教諭）と知り合い、音楽への関心とともに詩作の意欲高まる。	トシが花巻女学校を依願退職。入れ違いに着任した藤原嘉藤治と知り合い、以後生涯の友となる。 給料はほとんど本とレコードを買うのでなくなった。**給料は八〇円**（当時、高収入の部類）。**レコードは高価品で一枚一〇〇円。**塩釜にレコードを買いに行って、レコードを海に落としてしまい、泳いで探した（泳ぎは得意）。警察まで呼んで人が落ちたような大騒ぎをした。
一一月		童話「狼森と笊森、盗森」	
一一／一〇		童話「注文の多い料理店」	
一二月		**稗貫郡立稗貫農学校教諭となる。**	丸坊主にスーツ姿で表れた。校長からの紹介のあと、生徒への挨拶は、「ただいまご紹介いただいた宮澤です」**だけ。**担当教科は代数・農産製造・作物・化学・英語・土壌・肥料・気象・水田稲作等。英語の授業は日本語を使わなかった。近所で火事があったとき、授業を中断し、生徒を引き連れて消火活動しに行った。
		「愛国婦人」一二月・一月号に童話「雪渡り」。	
一二／二二		童話「烏の北斗七星」	病気で退職した同僚のために、毎月五〇円届けたりした。
一九二二（大正一一）一／六	二六	心象スケッチ「春と修羅」	成績の悪い生徒の通学する道の途中に**テストの解答をわざと落として**おいて、満点を取

一／一九		起稿。	らせた。
二月		童話「水仙月の四日」 ドイツ語、エスペラント語を始める。 花巻農学校のため精神歌を作詞、ついで応援歌、行進歌を作る。	農学校を受験する生徒についてきて、試験が終わるのを校庭で待っていた、道路がまだ決まっていない子に対して、「待っていても遅刻だろうから、**君も試験を受けちゃいなさい**」と言って受験させ、その子も合格させた。 入試の面接で、「**手の中を見せてください**」とニコニコしながら受験生に質問した。
四／七		童話「山男の四月」	賢治の主食は一時期**トマト**であった。
四／八		詩「春と修羅」	農学校の入学式。賢治はそれまでの丸坊主をやめ、**髪を伸ばし、ポマードをつけ**たりして茶目っ気を表すようになった。
五／二一		詩「小岩井農場パート1」	大麦脱穀作業を生徒と行ったあと、賢治は生徒たちに「**人はなぜ生まれたのか**」と問うた。賢治の答は、「人間はなぜ生まれたのかということを知るために生まれてきたのだ。この問題を本気で考えるか否かで人の存在価値が決定すると思う」。
六／二〇		コミックオペレット「生産体操」(後「鏡銀陣営」)。	実習作業のあと、ぶどう酒を禁めたものを「王水」と名づけて生徒に振る舞った。
七月		トシを下根子の別宅に移す。	**「アメリカに行って百姓になりたい。**」一緒に行かないか」と生徒に聞いた。花巻の町にできた精養軒という洋食屋からアイスクリームを買い、トシに食べさせるために、自転車に乗れない賢治は炎天の下をアイスが溶けるのを気にしながら走った。
八月		北上川岸小舟渡をイギリス海岸と名付け、生徒と泳ぐ。第三紀層泥岩層から偶蹄類の足跡やクルミの化石を発掘する。	
八／七		短編「イギリス海岸」	
八／二一		詩「原体剣舞連」	
九／一五		「稗貫郡地質及土性調査報告書」(岩手県稗貫郡役所)刊行。	
九／一八		詩「東岩手火山」	
一〇月		トシを豊沢町の本宅に戻す。	
一一／二七		**トシ逝去。享年二五歳。**	生涯独身で通した賢治には、妹トシが恋人のような(というより、自身の「半身」のような)存在だった。また、家族中唯一の法華経の理解者であり、賢治にとって「魂の友」だった。それだけにショックが大きかった。 トシの死の直前、賢治はみぞれ降る中へ出て、庭の松の枝から雪を取ってきてトシに食べさせようとした。また、松の青い葉を取ってきて、トシの頬にその針のような松葉をあてた。トシの耳元でお題目を叫ぶ。トシは二度、うなずくようにした後、息を引き取った。死の直後、賢治は**押入に首を突っ込んで慟哭**。
一九二三(大正一二)一月	二七	詩「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」	トシの分骨を持って上京。 清六に東京堂の「婦人画報」編集部へ童話原稿を持たせたが掲載を断られる。 静岡県三保の国柱会本部にトシの遺骨を納める。
四／八			『岩手毎日新聞』に童話「やまなし」。
四／一一			『岩手毎日新聞』に「氷河鼠の毛皮」。
五／一一～二〇			「岩手毎日新聞」に童話「シグナルとシグナレス」(一一回)。
五／二五			稗貫農学校は県立農学校となり、創立記念日のこの日、「植物医師」「鰹鉄障営」「バナナン大将」を講堂で上演。
七／三一～八／一		青森・北海道・樺太へ旅行。 詩「青森挽歌」	亡き妹トシを訪ねて旅行。**トシが天国に行ったのか、異界で迷っているのか**確かめるような旅だった。また、農学校生徒二人の就職依頼の旅でもあった。 海を眺めてトシを偲ぶ賢治の姿を見た船員は、**賢治を自殺者と間違いした。**

八／四	二八	詩「オホーツク挽歌」	
一九二四（大正一三）一／二〇		「春と修羅」第一集「序」。	この「序」には自己の言わんとすることを綴った、と賢治が語った（このように、作品の意図を自ら語るのは、賢治には珍しい）。
二／二〇		「春と修羅」第二集を始める。この集から作品番号を付す。	
二～三月頃		少年文学「山男の四月」の広告を出す。のち、『注文の多い料理店』に改題。	
四月		花巻温泉の街路樹、花巻病院の花壇の設計、造園をする。	
五月一九～二三		**心象スケッチ「春と修羅」一千部を自費で東京関根書店より刊行。**	家人には一言も語らず、一人で事を運んだ。印刷所は花巻駅通り川口町の吉田印刷所。用紙は賢治が生前発刊した詩集としては唯一の本。賢治が生前発刊した詩集としては唯一の本。「小岩井農場」をパート1，2と読み続けていくと、パート5、6だけその文字のみで本文がない。そしてパート7がある。するといきなりパート9がある。このように、賢治の意志による**空白の謎**がある。
五月		農学校生徒を引率、北海道へ修学旅行。	修学旅行中、オペラを見て熱中した。作品中にも、オペラ歌手の名が出てくる（田谷力三等）。札幌で、**生徒たちを道幅いっぱいの横列にして合唱させた。**
八／一〇～一一		菊池武雄に「注文の多い料理店」の装幀を依頼。	
		「饗餐陣営」「種山ケ原の夜」「ポランの広場」「植物医師」を生徒により上演。	
一二月		**イーハトーヴ童話「注文の多い料理店」一千部を盛岡杜陵出版部、東京光原社より刊行、新刊案内ほか広告を印刷。**	ほとんど**売れなかった。**
一九二五（大正一四）一月	二九	藤中海岸を旅行。	
二／九		森佐一に「春と修羅」の不評を告げる。	
五／一一		森佐一と小岩井農場から岩手山麓を歩く。	
七／一九		チェロ、オルガンの独習を始める。	
八月		詩「種山ケ原」	
		入貧中の清六を青森県山田野演習場に訪ねる。	生徒と夜中歩いて、花巻温泉まで行く。生徒とのお別れの記念と思ったか。
		学校を辞めて農民になる決意を持ち始める。	
一〇／二五		詩「告別」	
一一月		賢治を認めていた高山栄一郎校長が転任。中野新佐久校長来任。	かわって着任した新校長・中野新佐久は、これまで校長室がなかったことに怒って作らせたりする、難かな神経の権威主義的校長であった。

組　席

西暦（月日）	年齢	出来事	詳しいエピソード
一九二六（大正一五・昭和元年）一月	三〇	『月曜』（東京尾形亀之輔編集）創刊号に童話「オツベルと象。」	新年早々、桜の別宅の手入れを大工に依頼した。大工が錆びた釘を抜こうとして「こんちくしょう、何やら抜けない」と大声を立てた。賢治は、「働く人の気持ちは、さっぱりしていいものだ。感情を丸出しにして、釘が抜けなければこんちくしょうと言うし、まったくさっぱりしたものだ。**こういう気質を、私は一番好きです。**」と言った。
一／一五		花巻農学校に国民高等学校が開校され、講師を嘱託される。農民芸術、肥料の講座を受け持ち、課外でレコードを聴かせる。	
二月		「月曜」第二号に「さしき童子のはなし」。	佐々木喜善（「遠野物語」の語り部）の「奥州ザシキワラシの話」を読んだのを受けて書いた。
三月		「月曜」第三号に童話「猫の事務所」。	
		「農民芸術概論綱要」起稿。	農民の全てが芸術の産者である、と賢治は考えた。
		国民高等学校生徒のため、ベートーベン百年祭レコード・コンサートを催す。	
三／三一		**花巻農学校を依願退職。**	
四月		**花巻町大字下根子小字桜の家で独居自炊し、荒地を開墾、畑作を行う。**	動機は不明だが、前年六月の斉藤真一あて書簡で、「わたくしも来春には教師をやめて**本統の百姓になります**」と書いている。このころ書いた詩「春」。「日が照って鳥が啼き　あちこちの楡の林も　けむるとき　ぎちぎちと鳴る汚い草を　おれはこれからもつことになる」。賢治に辞めてほしくない生徒たちが、授業をストライキした。
五月		レコード・コンサート、子ども会を始める。	ナスやトマトを主食とする。訪ねてきたおばに、「**僕はナスの漬物が好物**で、それさえあれば何もいらない。五本も六本も食べます」と語った。農民と同じ生活をしようとした。
五／二七		器楽合奏を始める。	
六月		菊池信一に羅須地人協会の構想を語る。	貧しい旅のバイオリニストを泊めて、子供たちのためにコンサートを開いた。ローソクを灯して、一曲毎に一本ずつ消していった。
一一／二九		協会で科学の講義。	
一二／一		協会定期集会。	八月、羅須地人協会を設立。花巻町及び附近の農村に肥料設計事務所を設け、農村を巡回して稲作法、肥料設計（無料）などを指導。精力的に多くの農民と関わりを持ち、活動した。賢治が肥料設計して**収量が落ちた田には、その分を弁償する**という約束までしていた。「羅須」の意味は様々考えられるが、賢治自身は「花巻町の花巻という名のように、別段何もない」と語っていた。
一二／四		上京、神田区錦町三丁目一九番地上州屋に間借りし、エスペラント語、チェロ、オルガン、タイプライターの個人教授を受け、図書館に通う。	チェロのレッスンは朝六時から八時まで二時間。三日間だけ習った。顔に灰を塗って、「自分は特別の不治の奇病です」と言って、**女難を避けた。**
一二月下旬		帰郷。	
一九二七（昭和二）一月	三一	「春と修羅」第二集「序」。	
		協会定期集会。講義。	
二／一		岩手日報夕刊に羅須地人協会の趣旨、内容を紹介した記事が出て、合奏団は解散し、集会は不定期となる。	
三／二八		詩「野の師父」。	
四／九		花巻温泉南斜花壇設計。肥料設計を盛んに行う。	稲作指導で昼飯を出そうとしても、「今日はもうご飯を食べてきましたから心配いりま

七／一四	詩「和風は河谷いっぱいに吹く」。		せん」とか、「**私はあなた方が来られても差し上げるものはない**から、私もいただかないことにしましょう」と断った。
一九二八（昭和三）三月	三二	「聖燈」（花巻市梅野健三）に詩「稲作挿話」。	
六／七		水産、農産製品の研究のために仙台、水戸を経て八日東京、神田区錦町の上州屋に泊まる。	四／一〇に妹クニが刈屋主計（かずえ）と結婚。きっかけは、賢治が強引に結婚話を切り出したことだった。
六／一三		農芸学校設立の相談を受け、伊豆大島の三原へ伊藤七雄とその妹ちゑを訪ね、一五日東京へ帰る。	帰ってきて、「**あぶなかった**。まったく神父セルゲイの思いをした。指は切らなかったがね。俺は結婚するとすればあの女性（＊ちゑ）だな」と嘉藤治に報告した。＊「神父セルゲイ」＝トルストイの小説の主人公。肉欲を断ち切るため、斧で自分の左手人差し指を切り落とした。
八月		稲作不良を心配して過労のため風邪をひき、両側肺浸潤となり実家に病臥。	
一二月		急性肺炎となる。	
一九二九（昭和四）一月	三三	病中、妙法蓮華教への帰依強くなる。	
四月	三四	ヒヤシンス、ダリヤ、朝顔、菊を植える。佐々木喜蔀来訪。	詩「鯨人鼓して過ぐ」の中に、「八月一〇日から丁度四十日間熱と汗に苦しみましたが…（中略）…すっかりすがすがしくなりました」とある。
九／一三		東北砕石工場を訪ねる。	三回ほど訪ね、「この石粉は胸にいいのです」といって、石灰石の粉が立ちこめる中で縄を切る手伝いをした。
一〇月		清六が応召したので、一時実家の金物屋を手伝う。花巻菊商会の世話をする。	秋には花巻温泉にダリヤの品評会を見に行くほど回復する。「結局園芸から手は切れそうにありません」と語る。
一九三一（昭和六）二／二一	三五	東北砕石工場と石灰事業賛助のため契約書を交わし技師を嘱託される。	盆会の活動が、**金持ちの坊やのお遊び**と周囲に受け取られてしまったため。
三月		炭酸石灰の製法改良、販売に従事。九月までに秋田、宮城、福島、東京などを巡る。	秋田・宮城へ出張して受注が飛躍的に増大。しかし、心身はひどく消耗した。
七月		『児童文学』（東京、佐藤一英編集）創刊号に童話「北守将軍と三人兄弟の医師」。	六月、「栄養品というものはみんないけません。牛乳一口飲んでも、一日むっとします」と、森佐一あての手紙に書いた。
		岩手日報にこの年の冷害型天候と稲の分けつ出穂状況を発表。	七月、岩手日報に勧めていた若い友人の森佐一に賢治は、結婚問題が持ち上がったこと、相手が幼稚園の保母か何かをやっていることを話した。
		東北砕石工場のために精白用鳥粉の宣伝文を書く。	宣伝文を持って、米屋を一日二二軒回った。
九／一九		炭酸石灰製品見本を持って上京。	列車で仮眠。窓から吹き込む風に、急に悪寒と発熱を感じた。仙台で一泊したが、隣室の客が騒いで眠れなかった。
九／二一		**神田区駿河台南甲賀町一二番地八幡館で発熱、遺言を書く。**	三五歳になっても生計を確立できない賢治への、家族の支援保護が、賢治には苦しかった。遺書には家族への謝罪の言葉が多い。

九／二七			東京を去り、翌日帰郷。臥床。手帳に法華経の経句を書いて病苦に耐えた。
一一／三			科学の法則 ＋ 妙法蓮華教 →安心立命の境地 と手帳に書いてある。
一九三二（昭和七）一月	三六		「前ニモマケズ」
二／五			汽車から身なりを整えて降りてきたが、家に着くと倒れた。
三月			病床で高等数学を勉強。湯本村の高橋久之丞に肥料設計。
			病中でも、客に不快感を与えないようきちんとしていた。
五月中旬			『児童文学』第二号に「グスコーブドリの伝記」。
			清書しながら、笑ったり冗談を言ったりした。
一〇月			右側下顎第一大臼歯の外側歯槽膿漏から大出血。詩「眼にて云ふ」わずかに歩けるようになり、肥料設計を受ける。
一九三三（昭和八）一月	三七		習字を初め、易学に関心を寄せる。
六月			口語詩稿、文語詩稿の浄書を始める。
九／一〇			柳原昌悦あて書簡で悔悟と失意を述べる。
九／一九			**烏谷ケ崎神社の御輿を見る。** 絶筆短歌二首「方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭り三日そらはれわたる」「病のゆゑにも朽ちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし」
九／二〇 夜七時すぎ頃			**一人の農民の肥料相談に応じ、一時間あまり話を聞く。のち発熱。**
九／二一			喀血。国法妙法蓮華教の頒布を遺言。
午後一時三〇分			**永眠。**
九／二三			花巻町浄土真宗安浄寺に埋葬。

ベートーベンのピアノコンチェルト「皇帝」のレコードを聴いて、「おお怖い怖い。手に手に異様な獲物を振りかざして襲いかかる悪鬼迫る幻想」と叫んだ。

病体にもかかわらず御輿を待って、拝礼してから床につく。急に呼吸が苦しくなる。

「**そういう用ならぜひ会わねばいけない**」と言って、家人が止めるのも聞かなかった。農民は家人の誰も知らない人だった。

就寝時、弟・清六に、「今夜の電灯はずいぶん暗いなあ」「おれの詩と童話の原稿は皆お前にやるから、もしどこかの本屋で出版したいと言うて来たら、どんな小さな本屋からでも出版させてくれ。もし来ないときは無理にこちらから働きかけないで、手元に持っていてくれ」と言う。

午前一一時半、床の上に起きて合掌、張りのある澄んだ声で唱題。

これまで書いた作品の原稿について、父に、「**これらは迷いのあとだから、適当に処分してください**」と述べる。父が賢治の遺言のことをほめたので、「とうとうお父さんにほめられた」と弟・清六に言って喜んだ。

（この日の早朝四時半から五時、盛岡の森佐一宅の一階の土間で、賢治のゴム長靴のような歩く音がゴボゴボと聞こえたという。）

母に水を欲しがり、土瓶一杯飲み干して、オキシフルを含ませた消毒綿で身体のおおかたをぬぐい拭き、「**ああ、いい気持ちだ**」と言ったあと、眠りに入っていくように、呼吸も潮が引くように亡くなったという。

通夜の席上、父・政次郎の話

「若死、早世、夭折とは思わない。電球が、いっぺんに強い電流を流すとパッと白色光に輝いて目もくらむばかりに光るが、それっきり芯が燃え尽きてつかなくなってしまうように、短時間に凡人の何倍もの働きをし、燃え尽きた」

「賢治は若いときから手のつけられない、自由奔放で早熟なところがあり、いつどんな風に天空へ飛び立ってしまうのか分からなく、私はその天馬を地上につなぎ止めておくために生まれてきたようなものだ」

調べ学習　第五班　宮澤賢治エピソード収集班

組　席

収集テーマ　岩手山と賢治

西暦（月日）	年齢	エピソード
一九一〇　六月	一四	岩手山初登山。日の出を見て、網張温泉に泊まる。「風きむき　岩手のやまに　われらいま　校歌をうたふ　先生もうたふ」
九月		再び岩手山登山。小岩井農場を経て帰寮。
一九一一　一学期	一五	御釜湖の青い水面をのぞき込んでいて、友人から取り残される。慌てて走って戻るが、青い湖のことが気になり、何度も振り返る。「うしろより　にらむものあり　うしろより　**われらをにらむ　青きもの**あり」 岩手山単独登山。腰には、鉱物採取用の愛用のハンマーを携帯。
一九一二　夏	一六	**岩手山に慣せられる。** **盛岡中学時代に山頂まで登ったのは八回。三合目、四合目までの登山は数え切れない。** **盛岡における学生時代だけでも、三十回以上登った。** 柳沢から馬返しを経て、不動平まで急坂を登って、そこから頂上を目指すルートをよく登った。 賢治にとって、**岩手山は神に等しかった。**直立して祈りを捧げたり、「六根清浄、おう山繁盛」と唱えながら登った。
一九一四　四月	一八	鼻の手術後、高熱で入院中、**夢で岩手山の山神に面を刺されたら**、翌日から熱が引いた。
一九一七　四月	二一	岩手山、南昌山を歩く。
六月		弟・清六らを伴い、柳沢から登山。山道に迷って野宿。夜、山頂付近の空に**不思議な発光現象**（「超高層大気光」というオーロラのような現象らしい）を見る。
一九二二　夏	二六	生徒とともに豪雨の中、岩手山登山。 「こんな美しい自然の歩道の上を、月に光に照らされながら歩く気分は、まさに地球の華族だな」
一九二三	二七	土曜日の放課後、岩手山麓に出かけ、十里（約四十㎞）の道のりを歩いて、日曜の夜に花巻に帰宅することたびたびあり。
一九二五　五月	二九	森佐一を誘って岩手山麓で野宿。 理想郷イーハトーヴの最高峰カイラス山とは、岩手山のことである。

調べ学習　第六班　宮澤賢治エピソード収集班

組　　席

収集テーマ　父・政次郎と賢治

西暦（月日）	年齢	エピソード
		父・政次郎は、**謹厳**な、**信仰**に厚い人であった。若いときから仏典を好み、同志とともに中央から著名な宗教家を呼んで仏教講習会を開いた。 賢治には常々、「偉い者になれ」と**激励**し、人の道を正しく進むように**説諭**を与えた。 **家業の質屋兼古着商は、賢治にとっては陰気で、困窮者相手の商売という感のぬぐえないものであった。**
一九〇二 九月	六	賢治が赤痢にかかったとき、看病した父も感染し、それ以来、胃腸が弱くなった。賢治はこのことで、**父に対する負い目**を生涯持つことになった。
		法華経信仰の度が高まっていく賢治に対する、父の説諭 「これは困った。賢治は哲淡（あっさりしていてこだわらない様子）を通り越して**財産や生命にも無欲**になっていくようだ。あの島地さんの法華経を読ませなければよかった」 「いずれ財産を乱しては一家はつぶれ、一族は四散する憂き目を見るようになるから、賢治、お前もその方に心を入れて、下宿料のつもりで家へいくらか入れてはどうだ」 「賢治、お前の生活はただ**理想**を言ってばかりのものだ。宙に浮かんで**足が地についておらない**ではないか。ここは娑婆だから、お前のようなそんな**きれい事**ばかりで済むものではない。それ相応に**汚い浮き世と妥協**して、足を地につけて進まなくてはならない」 「賢治、お前の病気は悪用不足から来ているということだぞ。つまりきれいなことばかりやろうとしたために起った病気なのだ」
一九二一 一／二三	二五	突然東京に家出した賢治を心配して、父は時々小切手で送金したが、「謹みて挫したてまつる　賢治」と書いて返してよこすので父も心配しながら苦笑いしていた。
四月		父が上京し、「あまり堅いことばかり言わないで、一緒に旅行でもしよう。比叡山はお前の好きな伝教大師も日蓮上人も、各宗の祖師たちも修行された霊場だから」と言って比叡山や伊勢、奈良を旅行した。
一九二四	二四	父が桜の苗木を、賢治に、「時期が悪いから育たない」と言ったが、賢治は負けじと「育つ。もし育ったら私に二百円下さい」と賭をして成功し、「春と修羅」出版の借金を帳消しにした。
一九三三 九／二一	三三	お題目を唱える賢治の声を聞き、父は母に、賢治に聞こえないほどの小声で、遺言を書くための半紙と硯を持ってくるように言った。母は、「そんたなこととしたら、**お前はもう死ぬのだというのと同じ**だんすじゃ。そんたな無情なことしないでも」と必死で言うが、父は、「いや、そんなものではない。**これは人生で一番大事なこと**だから」と母の訴えを聞かなかった。

調べ学習　第七班　宮澤賢治エピソード収集班

組　席

収集テーマ　賢治の「禁欲」・女性観・恋愛観

西暦（月日）	年齢	エピソード
		「禁欲」
一九一四　四月	一八	鼻の手術で入院した岩手病院の看護婦・高橋ミネ（一八）に初恋。退院後、父に結婚したいと申し出るが、反対されて断念。これ以後、**恋愛感情への強い拒否**を示すようになる。
		もっと高度な存在への献身と愛、それを「正恋」というならば、**恋愛は「変態」である。**
		宗教上の戒律としても、賢治は性欲を一つの**人間罪**と考え、**精神と肉体労働の邪魔**になるものと考えた。
		生徒の菊井清人に、「人間が禁欲したり人のためになることをすれば、**神の言葉も見ることのできないものも、見聞きすることができる**」と話った。
		友人の藤原嘉藤治に、「**性欲の乱費は**、君、**自殺**だよ。いい仕事はできないよ。嘘だけでいいじゃないか。触れてみなくたっていいよ」と諭った。
		森佐一に、「人間の生活を、労働と性欲と思索の三つに分けた場合、…**この三つを一度に生活の中に成り立たせるということは、まずできません**」と語った。
一九一八五／一九二二	二二	**性欲の苦しみと闘う**ために、野原へ飛び出したり、牧場へ行って一晩中歩き回ったり、夜半高らかに法華経を唱えたりして転化し、厳く禁欲を守った。「性欲の苦しみは並大抵ではありませんね」。
		親戚から妻帯の話を勧められても、きっぱり断っていた。「生活力がないので妻帯しない。自分のことは自分がよく知っている。生涯一人でいたい」。母の妹のセツが恐る恐る結婚の話をすると、「今晩はこれで御免被ります」といきなり立って帰ってしまった。
		友人・保坂嘉内への手紙、「私はもし会は駄けても、うまいものは食わない。立派な家に住まない。妻をめとらない」。
一九二六	三〇	「羅須地人協会」の会員から賢治を紹介された小学校教員の女性が、賢治に好意を持って近づいたが、賢治は顔に墨や灰を塗ったり、自分は「レプラ（ハンセン病）」だと偽って彼女を避けた。
一九三一	三五	このころ考えが変わってきたらしく、森佐一に、「何か大きないいことがあるという功利的な考えからやった」のだが、「**禁欲は結局何にもなりませんでした**よ。その大きな反動が来て、病気になったのです」と語った。
		女性観
		「カスリの着物にもんぺで、蛇の目傘をさしているような娘が好きだ」
		「**心中の覚悟**をして、**永久に兄妹のように**して暮らしてもいいという女性となら結婚してもいい」
		「新鮮な野の朝の食卓に森のようにおりてきて、あいさつを取り交わし、一椀の給仕をしてくれてずっと消え去り、またあくる朝やってくるといったような女性なら、結婚してもいいな」
		恋愛観
		一方的な愛や、自分に戻ってくるもののない思いやりは、孤独を増幅する。しかし、愛とは報いを求めての愛ではない。他者に向ける愛がその孤独を抜け出したとき、一切を包む愛が愛そのものとなる。
		「恋の八〇％は、Ｈ２Ｏでできている。」
		「正しいねがひに燃えてじぶんとひとと万物といっしょにまことの福祉にいたらう」＝**宗教的愛情**
		「その願いから砕けまたは裁れ、ひとりの伴侶と完全永久にどこまでも行こうとする」＝**恋愛**
		精神的結合が求められず、無理にごまかして求めようとする＝**性欲**
		宗教の高い位置から見ると、恋愛は下降、性欲はもっと下降。

参考資料　＊順不同

堀　忠一「評伝　宮澤賢治」　佐藤　隆房「宮沢賢治―素顔のわが友」　板谷　栄城「素顔の宮澤賢治」
堀尾　青史「年譜　宮澤賢治伝」　宮沢　淳郎「伯父は賢治」　板谷　栄城「賢治と岩手を歩く」
関　登久也「宮澤賢治物語」　畑山　博「教師　宮沢賢治のしごと」　森　荘已池「宮沢賢治の肖像」
板谷　栄城「賢治　博物誌」　宗　左近「宮沢賢治の謎」　統橋　達雄「宮沢賢治・童話の世界」
桑原　啓善「宮沢賢治の霊の世界」　宮城　一男「宮沢賢治　地学と文学のはざま」　林　由紀夫「宮沢賢治　フイールドノート」
板谷　栄城「賢治　幻想曲」　宮沢　清六「兄のトランク」　森　荘已池「私たちの詩人　宮沢賢治」
山田　野理夫「宮沢賢治　その文学と宗教」　松田　司郎「宮沢賢治の旅」　中村　稔「宮沢賢治」
多田　幸正「宮沢賢治　愛と信仰と実践」　井上　ひさし「宮澤賢治に聞く」　福島　章「宮沢賢治」　関　登久也「賢治随聞」